

翠の猪苗代湖いつまでも

ジャーナリストスクール1班の6人は猪苗代町の県環境創造センター猪苗代水環境センターを訪れ、「猪苗代湖の自然を守る会」の代表鬼多見賢さん(72)と副代表の五十嵐定信さん(72)から、猪苗代湖の現在の環境や課題、周囲の地域との関わりなどについて話を聞いた。身近にある自然を守る大切さなどを学び、一人ひとりの中で「福島」がより深みのある言葉となった。

諸悪の根源「ヒシ」

崩れた生態系取り戻そう

猪苗代湖は美しいスカイブルーで多くの人々に親しまれている。しかし、

猪苗代湖の自然を守る会代表の鬼多見さんは「きれいな湖の色はスカイブルーは間違いであると指摘する。スカイブルーの湖は、実は生活用水が流れ込んで汚れている

面積は国内4番目

猪苗代湖は、日本の湖の中で、4番目に面積が大きい。周囲の長さは55.32キロ、山手線の34.5キロよりも20キロ以上長い。

状態。春先に見られる、きれいなエメラルドグリーンの色をしているのが本来の猪苗代湖であると強調する。

猪苗代湖を綺麗な状態に保ってきたのは、湖に流れ込む水の60%、年間10億リットルの水を供給する

容積は国内5位となっている。猪苗代湖の水の77.3%は水力発電、20.3%は農業用水にそれぞれ使われている。

長瀬川。強い酸性の清流が、有害物質やリン酸を沈めることで湖を浄化してきた。

しかし、近頃は生活用水の流入が増えたことに加えて、水生植物のヒシの急激な繁殖によって生態系が崩れてきた。地元

住民らがスーパーマーケットで野菜を購入する割合が増えたことで、ヒシを食用にする機会が減り、ヒシが猪苗代湖全体を覆ってしまうほどに急増した。そのことによつて、ヘドロが発生し湖を汚している。(みゆ)

「天鏡湖」を守る



取材日の朝に刈り取られたヒシの葉

2017(平成29)年4月に開所した、県環境創造センター猪苗代水環境センターを拠点の一つにしている猪苗代湖の自然を守る会は、「天鏡湖」と呼ばれる猪苗代湖の自然を守るために、湖や湖に流れ込む川の清掃活動などを展開している。

白鳥の調査や、水生植物の「スゲ」を使った体験教室を開いたり、地元の小学生と水生植物「アサザ」の保全にも取り組んでいる。このうち、スゲを使ったゴザ作り体験では、竹筒などを使い、ゴザの編み上げ方を分かりやすく紹介している。(ゆら、ひなこ)

私たちが作りました

猪苗代湖に学生の団体や観光バスが来ない時期があったという。福島のコメはおいしく、検査を受けて安全であるにもかかわらず、売れないこともある。正確な情報を伝え、風評やデマにだまされないことが大切だ。(ゆら、ひなこ)

原発事故 風評続く

猪苗代湖周辺は東京電力福島第1原発事故による直接の被害は少なかったが、風評は今でも残っているほど大きい。

代湖では、気温の差が大きいため、冬の方がよく観測されるという。湖に浮かぶ翁島には石仏などが残り、かつては陸地とつながっていたことが分かる。(けいこ、しょう)



猪苗代湖の変化を説明する五十嵐さん(右)



故郷の大切さを教える鬼多見さん

故郷を知る大切さ

「自分の故郷をよく知って、その良いところを見つけてほしい」と鬼多見さんは訴える。

猪苗代湖の汚れは人々が気付かない間に、少しずつ拡大してきたと振り返る。「猪苗代という地域は自然なしでは考えられない。だから、みなさんと一緒に猪苗代湖の豊かな自然を守っていききたい」と語り、一人でも多くのボランティア活動への参加を呼び掛けている。(たいよう)



伊藤光雪(桜の聖母学院高2年) 鈴木日奈子(吾妻小6年)
細田太陽(小原田中3年) 中村圭吾(国見小5年)
佐藤結来(福島大付小6年) 猪亦慳(城北小5年)